[サリュ]

フランス語で‘救い’の意。

Salut

人が集まる。いのち弾ける。

シアトリカル

應典院

平成9年、スタート。

発刊のごあいさつ

文化のお寺應典院の再建は、なにわの名刹大蓮寺が創建440周年記念事業として着手するものです。大蓮寺は、多くの文人や教育家、また芸能家とも縁の深い、文教の寺院。應典院はその伝統を踏まえ、地域に開かれた、まったく新しい都市型寺院として平成9年に竣工します。

その構想は、劇場型の本堂を有し、あらゆる世代を対象としたさまざまな研修やイベントを開催、新しいこころのエネルギーを放つ、文化創造の拠点づくりといえます。もちろん劇場機能も装備し、演劇やアートなどの自主公演なども計画、まさに都市の異界として、多くの注目を集めることでしょう。そして、すべての根本に流れる大乗仏教のみ教え――大慈悲＝救い、を、いまという時代に伝えるため、應典院は永劫に一心に精進を重ねる所存です。

本誌は、應典院の実現に向け、すでにスタートしている多くの教化・教育事業、またそれに加え同寺のプロデューサーとして活躍する秋田光彦住職の活動ぶりをお伝えするものです。当面、夏と冬の年2回の刊行を予定しておりますので、どうか末永いご愛読をお願い申し上げます。

應典院再建委員会代表　秋田　光茂

文化のお寺〈應典院〉のニューズレター

3

1995●SUMMER●VOL.3
発行■應典院再建委員会
編集■サリュ編集部

應典院　〒543 大阪市天王寺区下寺町1－1－30　TEL(06)771-7641 FAX(06)771-5943

應典院・秋田住職　各メディアで発言

～應典院のこと、そして新しい仏教への試みについて～

今、さまざまなメディアが應典院の秋田住職の動きに注目しています。4月7日付の読売新聞夕刊（①）では、主にアーユス関西＝仏教国際協力ネットワークの代表として、阪神・淡路大震災の救援活動についてのインタビューに回答。應典院の再建計画にも質問が及び、「地域に開かれた全く新しい都市型寺院を目指しています」と答え、「應典院は都市の中の異界。ぼくはそこに住む異人でありたい」と語っています。

また、6月13日にはＮＨＫ総合テレビの番組「にんげんマップ」に出演。住職の多彩な活動にスポットがあてられ、レギュラーの黒田清さんや女優のわかぎえふさんと、現代の仏教事情について語り合いました。この中では、おなじみの「メディア説法」が実演されましたが、テレビ放映後、住職の新しい教化活動について問い合わせが殺到。大きな反響を呼びました。

さらに6月15日の朝日新聞夕刊（②）には、連載インタビュー「オウムの闇」に既成仏教の立場から発言。世間を騒がせている一連の「オウム問題」に鋭くメスを入れるとともに、「寺をボランティアの拠点に」というユニークな提案を行い、「同じく悲しみ同じく苦しむ者として共存していく」という仏教者本来のあり方を問いかけました。

日経新聞7月19日夕刊（③）には、京都精華大学助教授橋爪紳也先生が寺町文化における應典院の試みに言及、そのユニークな活動にエールをおくっています。

②


オウムの闇　インタビュー特集　•5•
既成仏教
秋田　光彦さん（39）
寺をボランティアの拠点に

①


大蓮寺（大　阪）
あのかど羅針盤
地域に開かれた寺院
腰すえ自由な発想で

③


ふれあいトーク　今日の人
秋田　光彦さん　39
地域に開かれた都市型寺院めざす
宗教
4月7日（金曜日）　夕刊

世紀末の都市の中で アジア仏教の輝きを見た。

應典院住職　秋田光彦師に聞く。

日本宗教の終わり？

まだお屠蘇気分の抜けきらない一月十七日未明、記録的な大地震が阪神地区を直撃、五千五百人を越える尊い人命が奪われました。さらに追い打ちをかけるように、三月二十二日、地下鉄サリン事件発生、その後、日本中がオウムの闇に包まれた数カ月が続きます。世紀末的な恐怖と不安が、周辺の日常社会の話題を独占しました。

もちろん、多くの宗教者も、二つの事件に無関心ではありませんでした。

教団から宗教学者まで、具体的な行動や発言が顕著に見られましたが、逆にもっと拡声されたものは、市民や世論の、宗教そのものに対する疑惑と不信の表明でした。

想像を絶する被害を生んだ阪神大震災の現場にあって、誰が宗教的な救済や癒しを求めたか——精神科医やカウンセラーの言説を借りることでしか活動できなかった、宗教家の本質的なジレンマがそこには横たわっています。また、オウムという異端の宗教だからこそ、一気に宗教への批判が、激しい憎悪となって噴出しました。宗教法人見直し論だけではない、もっと本質的な懐疑の感情が、やがて宗教界全体に対し勢いを強めていくことでしょう。

伝統仏教だけが例外であるはずがありません。むしろ、そういう不信の堆積は、長い間葬式・墓・檀家などの制度の上に安住してきた日本仏教の空洞が育んできたものではなかったのか——。この状況を、宗教学者の山折哲雄先生は、「今年は、日本の宗教が潰滅的な打撃を受ける紀元元年になるだろう」と、厳しく批判されています。

未成熟な日本人のこころ

同時にこの二つの事件は、日本人と宗教という曖昧な関係を、白日の下にさらけだしました。

オウムのマインドコントロールが悪だと断罪され、その側で、被災地のこころのケアが称賛される。宗教＝善という図式の下で、いつの間にか日本の宗教はきれいに漂白され、そこから人間の精神の深奥を見ることがむずかしくなりました。戦後教育は、そういう自己の精神と向かい合うことを、意図的に遠ざけようとした歴史でもありました。

うまくいえないのですが、一般に言われる宗教教育というようなものでは補えないほどの大きな欠落感が、ぼくにはあります。「こころ」によほど無関心なのか、あるいは、「こころ」さえ商品として消費化しないと受け入れられないのか、いずれにせよ、宗教論議が活発になるに比例して、日本人の「こころ」に対する未成熟さが露見されてきました。

誤解を恐れずに言えば、多くの日本人に与しながら、宗教者たちもまた「こころ」の問題を語ることを、長い間避けてきたような反省があります。「こころ」を率直に語ることばや態度を、何かに閉じ込めているうちに、もはや共通の言語感覚を取り戻せなくなっているというのが実情でしょうか。

日本の宗教者が、日常レベルでどのように



1993. ニュー説法の一場面

実在そのものに迫る努力をしてきたか。二つの事件は、長い停滞の歴史をあぶりだしたかのようです。

アジアの仏教に学ぶ

そういう渦中に、アジアからやってきた二人の仏教僧にめぐりあいました。

ひとりはベトナム出身のティク・ナット・ハン師。ベトナム戦争当時、「行動する仏教」を標榜し、パリ平和会談に仏教界を代表して参加、その影響力の大きさ故、ベトナム政府から帰国を拒否され、いまも南フランスで瞑想の共同体を主宰する僧侶です。もうひとりはタイのナーン和尚。9頁にもくわしく紹介しましたが、タイの貧村に対し仏法による経済自立を促進してきた、代表的な開発僧（内面的な精神の開発の意）のひとりです。

この二人のアジア僧が、時期を同じくして来日、講演やリトリート、書物など通じてその生き方にふれることができました。

ふたりの講演会などに足を運ぶと、会場を埋めるのは、大半が若い人たちであることに小さな驚きを感じます（しかも、その来日に貢献したのは、若い人たち中心の市民団体でした）。むろん、祖先信仰の話があるのではない。そこでは、自己と社会、自己と精神の話が、具体的な修法とともにじつに分かりやすく語られます。「オウムになぜ優秀な若者が？」式の質問を発する人たちに、その不思議な光景を見てほしかった。

二人の口から語られる仏教は、難解な教義などに一度もふれられることはありませんでした。詩的ともいえるほど、やさしく心地よいことばづかい。いずれも共通して「瞑想と生活」を訴えていたことも印象的でした。

また、二人とも社会から目を逸らさず、社会の中で「仏法の実現」を図っていました。時に批判にさらされながら、臆さず堂々と自分の仏法を、運動として社会に投げかけていく。社会と向き合う中から、誰にでも共感できる仏教が育まれてきたことを、ぼくは同じアジアの仏教僧から教えられたのでした。

講演会に集まった大勢の若者たちは、何を求めにきたのでしょう。自分たちのいまを探して、慈悲と智慧の教えにめぐりあった時、彼らの人生はどのように変化していくのでしょうか。

日本の宗教の危機の真っ只中にあって、じつは最も身近なアジアの仏教に、それを解く鍵があるような、そんな気がしました。

應典院。新仏教の拠点へ

今回は固いお話になってしまいました。

今号の特集にもありますが、ぼくにとって一月からの数カ月間は、ボランティアという問題に初めて直面した、重大な時期でもありました。

その結論は簡単に導かれるものではありませんが、確かなことは應典院がその拠点として学ばなければならないことは、じつに多いということ。人材養成やシステムづくり、應典院の具体的な「仕事」が、見えてきたという感じがしています。

ついでながら、應典院の募財活動も始まりました。目標は三千万円。どうかみなさんのご厚志をお願い申し上げます。

TALK&TALK

阪神大震災を走る。「同事」としての仏教ボランティア。

川副　春海

「サリュ（Salut）」愛読者ならご存知だとは思いますが、新聞・テレビなど各メディアに「アキタ・ミツヒコ」という《記号》があふれていますね。この春以降でも先月のNHK「にんげんマップ」には、丸いメガネの秋田師が出演していらっしゃいましたし、朝日新聞の「オウム真理教」連載インタビュー「オウムの闇」にも、読売「阪神大震災」ドキュメントにも、また読売夕刊の宗教のページには丸い顔、丸いメガネの笑顔がどーんと紹介されていました。週刊誌「B・ing」にも應典院プロジェクトが掲載されました。

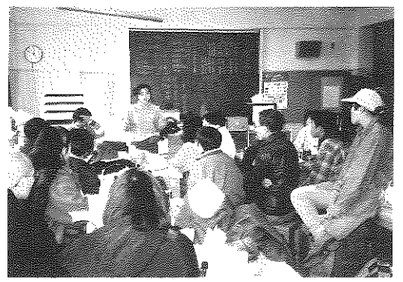
例えば女優さんには、マスコミのカメラを向けられると、疲れていようがなんだろうが、美しい笑顔でカメラに向かってしまうというプロの習性があるように、メディア人秋田師も、取材に会うとそれはもう立て板のおしゃべりです。取材記者は大喜び、紹介するペンの動きも軽く、紙面には大きな活字が躍ります。

いわく「都市型寺院を目指す元気印のお坊さん」「現代のメディア布教を目指す名刹の僧りょ」などなど。しかし、「アキタ・ミツヒコ」という《記号》は、困ったことに「秋田光彦」本人の実体を離れて、ときどき一人歩きしてしまうことがあります。さらには、読者の興味という怪物に消費されて、食い尽くされてしまうことだってあります。取材記者の立場に立ってみると、分かるのですが、どこにもいそうなお坊さんをメディアで紹介しても、ニュース（情報）にならないのです。「『元気印』の若いお坊さん」「宗教イベントを企画する現代僧侶」がいると報じて、やっと読者（視聴者）の要求に合う記事（番組）ができるんですね。密かな共犯関係が、マスコミの送り手と受け手にはあるんです。

仏教者たれ

確かにそんな報道は、一面の秋田師を紹介しています。しかし、そんなあまたの報道がもちろんすべてではありません。当たり前なようですが「仏教者である」という秋田師をときどき発見してほっとします。いや、まず伝統的な仏教僧秋田師がいて、その上にメディアに露出している《アキタ・ミツヒコ》がいるんではないでしょうか。常に「仏教者たれ」という視点があるからこそ、メディアという怪物に飲み込まれず、記号として消費されずに、常にフレッシュでいられるのではないかと想像しています。

というのも、こういうエピソードがあります。冬の一番寒い時期に京都の浄土宗の総本山で修行の場が、僧侶に用意されています。総本山知恩院の奥のお堂で、意欲あるお坊さんが自発的に参加して、お念仏にお経三昧、宗祖法然上人の教えを学ぶ厳しい道場です。そこでどうも秋田師は、人目を盗んで修行しているようなのです。彼一人、ひっそりと人知れず、お山に籠もっているようなんですね。象徴的な話ですが、秋田ウォッチングを続けてきて、そこかしこ「仏教者・秋田光彦」を、仏教を再生しようと悪戦苦闘する秋田師を発見します。現代の表層を滑走するメディア人ではない顔を発見します。



お話ボランティアのミーティング風景

ボランティア元年

一月十七日未明に発生した阪神大震災。ここでも秋田師は「自称イベント屋」という血が騒いだのかNGOアーユス（仏教国際協力ネットワーク）関西代表として、ボランティアに熱中していました。「アーユス」とは、仏教の僧侶が宗派を超えて集まった国際協力のボランティアの団体です。東京に本部を置き比較的若い僧侶が参画して運営しています。阪神大震災は日本のボランティア元年といわれたほど、さまざまなボランティア組織が参加しました。アーユスもその一つ、国際ボランティアとはいえ、国内の未曾有の災害に、早くから行動を始めました。



読経回向ボランティア

十七日の発生は、テレビが発生当時から刻々と伝えました。同日早朝から、その被害の大きさに、全国が気づき始め、アーユスも錯綜する通信網で苦労しながら東京の本部と関西の秋田師を中心とするグループにアクセスし出します。翌十八日、アーユス理事長茂田真澄師、事務局長平山恵さんが、秋田師と苦労しながら連絡を取り、行動が始まりました。まだ、阪神間の交通は分断、車の大渋滞の中、二十二日には打ち合わせを始め、二十三日に神戸市のJR新幹線・新神戸駅前にある浄土宗東極楽寺に神戸緊急連絡事務所を設置しました。後々の反省ですが、あと二日この緊急連絡事務所が早かったらもっと活動ができたのにという後悔もありますが、阪神間の移動でさえ一日がかりという当時、それでも他のNGOと比べても遜色ない活動でした。

この時期、全国のボランティア団体はじめ、テレビで震災の悲惨を目撃しなにかしなくてはという衝動に駆られた市民、学生ほか多くの人々が、さまざまな救援活動を開始しました。まだ避難民が三十万人を超えて、倒壊した阪神高速道路の架橋が横倒しになったままのころです。あるものは、炊き出しを行い、あるものは毛布、不足していると伝えられるポリタンクをもって阪神間を往復、徐々に整備されつつある避難所でのボランティアも学生を中心に始まりました。

秋田師の活動には、ここでも「仏教者であれ」という基音が響いていました。マスコミなどを有効に使った人材の募集、さまざまな会議、イベントなどの活用など変奏曲の基底には、常に仏教者としてどう行動すべきかという課題があったのではないかと思います。それはどういうことか、もう少し時間にそって見てみましょう。

アーユス（東京）は二十五日には、そのネットワークを使って僧侶に呼びかけ、被災者の遺体を荼毘に付す神戸市のひよどり斎場で、読経・回向ボランティアを始めました。葬儀もあげられずに、横死した方々の冥福を祈るボランティア、想像を絶する事態に悲嘆に暮れる遺族への心のケアとも言える行為でした。これは、いわば「職業」としての僧侶の活動といえます。無論、大きな反響を呼び、遺族の方々に好意的に迎え入れられ、逆にまた宗派を越えて読経した僧侶の側にも、新しい可能性を示唆してくれました。

僧侶にしかできないこと

そののち、アーユス関西として、秋田師が取った活動は、罹災して着の身着のままで避難所に逃げ込んだ被災者へ、僧侶としてお話を聞くという「お話ボランティア」という名の活動でした。大阪市仏教会など在大阪仏教各会の協力で、アーユス関西の服部隆志師の奔走もあり「大阪仏教救援センター」を組織、そのバックアップの元に二十八日から活動をはじめ、新聞でボランティア希望者を募るなど組織的な動員で三月初旬まで活動が続きました。秋田師の話を聞いてみましょう。

「それまでの回向ボランティアが僧侶の職業性に立ったボランティアならば、お話ボランティアは僧侶そのものの人格性に立つものだと考えていました。同事の精神（悲しみも苦しみも同じく協力しあう）を、葬送の儀礼ではなく、人間的なふれあいの中で実践できると思いました。こういう表現は誤解を招くかもしれませんが炊き出しや募金は誰でも（僧侶でなくても）できる。あの当時、僧侶しかできないことに非常にこだわっていたと思います。ボランティアは自分探しと言われますが、その意味ではお話ボランティアの考え方は、成功したと思っています。その時点ではだれもがそんなボランティアがあるとは思ってもいなかったのですから」と言います。つねに仏教

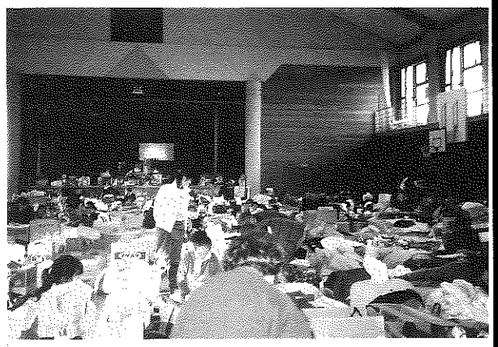


「お話ボランティアを語る会」於 太融寺

者、僧侶であることにこだわる硬派秋田師の気持ちの伝わる発言ではないでしょうか。

つまり、仏教そのものがもつ「同事の精神」、助けるものも助けられるものも視線を同じくして、事に当たり、また哀しみも喜びも同じくするという精神、そのものの具体化が「お話ボランティア」ではなかったのでしょうか。それは畢竟、仏教の菩薩道の実践、「自利利他」（自らの利益を得ることは他者の利益を得ることとおなじである）という無私の行為と、軌跡を共にする行動ではないでしょうか。これを現代に具現化することはとても難しいとはいえ、その発端がこのお話ボランティアにあったのではと想像しています。

具体的には、最も被災の大きかった地区の一つ、神戸市東灘区の六甲小学校など三校で毎日、被災された方々のお話をうかがう介護ボランティアを行いました。長期化する避難所生活で不安定になりがちな被災者のさまざまな悩みを聞き、心のケア（精神的なサポート）をする活動です。雑多なボランティアの人材の活動について内容を周知していただくために、「お話ボランティアマニュアル」をアーユス（東京）スタッフ野田真里師が作成、これを元に活動しました。僧侶と募集に応じてくれた市民ボランティアなどでチームを編成し、介護だけでなくさまざまな雑用をこなしました。また避難所内では避難所新聞の発行、他にも六甲寄席、法話の集いなどのイベントも行いました。お話ボランティアへの参加は三校でのべ五三四人（僧侶一五二人）にのぼりました。またアーユス関西とともに活動した阪神大震災のための一時的な組織であった大阪仏教救援センターは、「仏教ボランティアおおさか」として今後、衣替えして、秋田師、服部師などが中心になって運営されていくそうです。


六甲小学校避難所

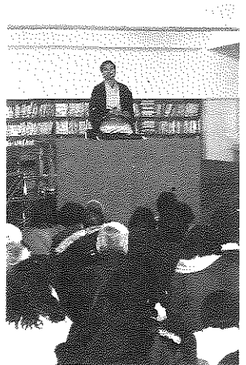
ぼくたちの失敗

一月二十四日にアーユスの神戸緊急連絡事務所に入り、その後アーユス関西のお話ボランティアのマネージメントを担当したアーユス事務局スタッフの杉崎直美さんに、お話ボランティアの現場を聞いてみました。「まだ避難所が未整備でさまざまな問題が次々と発生している初期のころは、このお話ボランティアはとっても反応もよく感謝されました。例えば尼僧さんが、法衣（作務衣）をきて被災者の方々と話してらっしゃる姿にはとってもインパクトがありました」。ただ、ボランティアが長期化するにつれて、その活動も風化していったのではないかとつけ加えてくれました。「避難された人々のニーズ、刻々と変化する人々の希望に対応するのは、こんなに難しいものかと実感しました」とも言う。

お話ボランティアは大成功とはいえませんでした。秋田師はこう回想します。「理想とはほど遠く、現場は大変混乱しました。避難所のボランティア本部との意思の疎通が壊れ、一時は険悪なムードさえありましたが、結果的にはお話ボランティアのような継続性と忍耐が必要な活動を、遠方（大阪）からコントロールしようとしたぼくの方に否があったのだと考えています」。まあ、日々刻々と変化する現場の状況、学生を主体とする避難所のボランティアのリーダーシップを考えると、ここまで否定的になる必要はないような気がしますが、一つには、別に法務や仕事を抱えながらのボランティアの一般的な難しさとも言えるのではないでしょうか。

さらに秋田師は本質的な問いを投げかけています。「僧侶の人格性……と言いながら、現場の大半は学生や一般市民で、ぼくが期待した僧侶のリーダーシップが実現できなかった。というより僧侶たちがこだわったのは所内の『法話の集い』の開催であったり、旧来の位牌・遺骨・仏壇などのケアに傾注することでした。寺檀を越えて市民と意欲的に交流しようという動き、あるいは、制度を越えて自己をとらえ直そうという動きが非常に少なく、反省すべき点は数多くあります。お話ボランティア自体のノウハウは間違っていません。多分問題はそのシステムと人材という二点につきるような気がします」。

これまで、寺院と檀家という制度に安住した僧侶が、はたして、制度を取り払ったフィールドに投げ出されて、仏教という教えのみで災害で身も心も傷ついた被災者の心の救済をできたのか？　また、現実に葬儀やさまざまな葬送儀礼の執行者としてしか社会から認知されていない現状の僧侶が、儀礼執行という武器なしに裸で、人々の悩みを「同事」としてとらえることができたか？　非常に大きな問題がそこには横たわっているのではないでしょうか。


「元気が出る落語会」於　六甲小学校避難所（二月初旬）

制度を越えた心の交流

ご存知のように應典院プロジェクトが、今年から具体的に動き始めています。「サリュ」誌でもこれまで、何度か報告されているように、このプロジェクトは「学びの場、遊びの場、そして祈りの場を都市の中に開く」という考え方で、新しい劇場型寺院を再建するという計画です。劇場やギャラリーに変身する本堂、そこで、さまざまなイベントが仕掛けられていきます。そこにもこれまで、見てきたような秋田師の思い、寺院でのさまざまなイベントを創出すると同時にまず「仏教者たれ」という切実な希求が底流を流れているようです。

お話ボランティアの活動を通じて、秋田師の問い「寺檀を越えて市民と交流できるか？」「制度を越えて仏教、僧侶、自己をとらえられるか」。これらの重い問いかけを、秋田師はこの應典院プロジェクトに賭けているのではないでしょうか。新しい形の仏教の法要、説法、儀礼を創出し、演劇、音楽、美術など都市の活力と拮抗できるさまざまなイベント、セラピー教育、障害児教育、NGOの開発教育など「同事」の考え方を教育に生かす拠点として寺を創出していく、そのための拠点づくりが、「制度を越えて自己をとらえる」という問いの秋田師なりの答だと思います。（文／かわそえしゅんかい／僧侶・オフィス三蔵堂代表）

連載・宗教乞食のモノローグ（3）

男らしさ

中谷　加代

祖父、母、姉と四人で暮らしていた中学生の男の子、マア君の話です。

一瞬にして一家が生き埋めになってしまった一月十七日の朝、近所の人の「大丈夫かあー、生きてるかあー」という呼びかけに、マア君は、「ぼくはええから、お母ちゃんと、お姉ちゃんを出したって！」といったのだそうです。「お母ちゃん助かったかー。ほんならお姉ちゃんを頼むでー」。マア君の声は明るく元気だったといいます。「おじいちゃんを出したってー！」。ぼくは大丈夫や」というマア君の声に励まされて、皆がおじいちゃんを助け出した時、火の手が迫ってきて、煙に巻かれたマア君は、スーと息を引き取ったのだといいます。神戸市長田区でのできごとでした。

初めてこの話を聞いた時、もう悲しくて、声をあげて泣いてしまいました。今でもこの話は、思い出すだけでも涙が出てしまうのです。お父さんのいないマア君は、中学生にして既に一家の大黒柱であったのですね。男として我が身を犠牲にして家族を救ったマア君の生き方に胸がいっぱいになります。

同じ長田区で、やはり生き埋めになっていて助けられた初老の男性は、「わしが先に出してもらわな、妻を外に出してやれなんだんや。その時が一番辛かった。もし今、妻が生きてなかったらと思うと…。時々夜中に飛び起きて、『生きとるな』と妻に声かけてまいますのや」とおっしゃっていました。この方のお話も、時が経つほどに骨の髄まで染み込んだ〝男というアイデンティティ〟を教えられるのです。

あの未曾有の大地震のあとで、私の周りでは、お父さんの男らしさに触れて、グータラ息子や娘がしっかりしたり、不登校の子どもが登校しだしたり、非行の青少年が立ち直ったりしてゆく姿を多く見かけたものです。

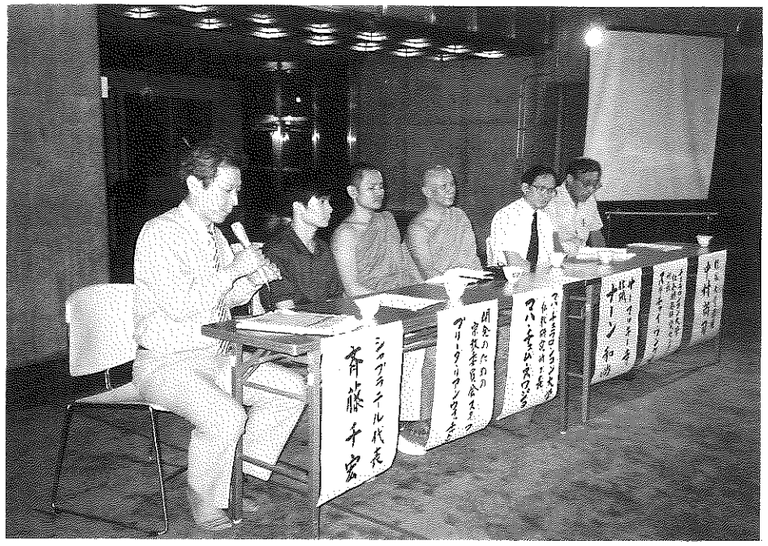
その一方で、家族から「男のくせに、助けてくれなかった」とか、「男のくせに、壊れた家の補修もまだようせえへん」など、さまざまな欲求不満を家族からぶつけられている人がいます。そのことが、密かに自分自身で悔やんでいることでもあった時、深刻な自己嫌悪や自信喪失につながり、自殺念慮にまで発展していった人もいるのです。

強い男像とともにまた、弱い男像も浮き彫りにされたのです。

寅さんの映画じゃないけれど、〝男はつらいよ〟が身に染みるのです。でも、相対する存在の女としては、そうばかりもいっておれません。決して他人ごとではありません。

ご予息に先に逝かれて、残されてしまった母の苦しみもまた、思うだに胸のつぶれることではあります。私も母、私も女、せめて生き残ったこれから先は、男にやさしく「無理しなくてもいいじゃないの」といい、息子にただ「ありがとう、生きていてくれること、それだけでありがとう」といいながら暮らしましょう……いつまで続くかわからないけれど…。

（なかたに　かよ／カウンセラー）



7.4「仏教・もうひとつのNGO」 於　一心寺日想殿

「仏法は私たちの心の中にある」

1995.7.2～7.5　タイ開発僧・ナーン和尚が来日

仏教NGOの実践者が来寺

人々の仏教の信心厚い“微笑みの国”タイ。去る7月2日、そのタイより4人のお客様を大蓮寺にお招きしました。

ナーン・スッタシロ師はタイ東北部スリン県ターサワーン村のサーマッキー寺住職。「開発僧」と呼ばれるナーン和尚の活動とその生き方に、地元タイのみならず世界中のNGO（非政府組織）が注目しています。

マハ・チェム・スワジョ師はタイの名門仏教系大学、マハ・チュラロンコン大学仏教研究所所長。

スリチャイ・ワンゲーオ教授。チュラロンコン大学社会開発研究センター所長で、日本留学の経験をお持ちです。

プリーダ・リアンウイッチャトン氏。タイの代表的なNGO「開発のための宗教委員会」（TICD）のスタッフです。

この4人のゲストによる「仏教・もうひとつのNGO」が7月4日、一心寺・日想殿で開催されました。これは秋田師が代表を務めるアーユス関西＝仏教国際協力ネットワークとタイ仏教の研究会の共催により実現しました。

アジアの智恵に学ぶ

7月3日は雨。京都に向かうその朝、秋田師が言いました。「生憎の天気ですが、足元にはお気をつけください」。ところがナーン和尚は怪訝な表情です。スリチャイ教授が説明してくれました。「ナーン和尚の住むタイ東北部は雨がほとんど降りません。和尚の目には“恵みの雨”と映ったのかもしれませんね」。

京都に到着。三十三間堂、智積院庭園を拝観し、記者会見会場へ。10名以上の宗教担当記者が集まり、仏教による「開発」について言及されます。その中で、マハ・チェム師が挙げた「開発」に不可欠な4つの要素は示唆的でした。

その4つとは、1.「衣食住の条件が整っている」　2.「人と人、人と自然との関係の調和」　3.「心と精神面の安定」　4.「学ぶこと、探究心」です。

これらはタイの農村開発に限らず、今年、震災を経験した私たちが最も痛感することです。また應典院が目指すこともここに見いだせます。「心と精神」「学ぶこと」とは、そのまま應典院のテーマでもあるのです。同じアジアの国に、そのことを改めて教わる思いがしました。

仏法の実践と「開発」

その夜は、大蓮寺本堂で「仏教者のための瞑想のつどい」というささやかな会を開きました。これは、秋田師を始め若手の仏教者の集いで、ナーン和尚とともに、しばし瞑想の時間を体験しました。

翌7月4日の朝、パドマ幼稚園の園児と交流の場を持ちました。子どもたちの澄んだ歌声と、ナーン和尚のやさしい笑顔が印象的でした。その後、近在のタイ料理店で在阪のタイ人を対象にタンブン（布施）を行い、今さらながら、タイの人々の厚い信仰心に驚かされました。

いよいよ、一心寺でのシンポジウム。連日の雨にも関わらず、70名もの多くの熱心な参加者のもと、開会されました。

龍谷大学の中村尚司教授による解題に続き、ナーン和尚の活動を紹介。和尚は貧しい村人たちの経済状態を改善するために仏法を適応させ、仏教の伝統行事を通して物資を集め、村の開発にあてるなど、さまざまな取り組みを実践しています。また「心の開発」を行うことにより、村人の精神面のサポートも大切にしています。これらの実際について、スライドなどを用いた詳細な報告がなされました。

司会のシャプラニール代表・斉藤千宏氏は、「日本のこのような立派なお寺がNGOなどの市民活動の場を提供してくださったことは、画期的なことです」と締めくくられました。

●

翌朝、名古屋行きの列車に向かう車中ナーン和尚は、「この4日間、太陽を見ることがなかった」と、さすがにこぼされていました。「スリン（ナーン和尚の住む村）だと、よかったんですが…」とお答えすると、笑みを浮かべ、静かに頷かれました。ナーン和尚のご健康を心よりお祈りいたします。

（こいずみ　のぼる／大蓮寺職員）



7.4パドマ幼稚園児との交流　於　大蓮寺

震災ボランティアを振り返る「お話ボランティアを語る会」開催



去る3月3、4日の2日間にわたり、大阪北区の太融寺を会場に、このたびの震災のボランティア活動を振り返る学習会が開催されました。両日で参加79名。

主催の大阪仏教救援センターは、大阪の仏教会7団体によって設立され、事務局を秋田師が担当。同センターは、震災後に避難所となった神戸市内の3つの小学校で、被災者をはげます「お話ボランティア」を展開。4月2日までにのべ534名が参加しました。

この学習会では、ボランティアに参加した僧侶や一般市民が体験報告。各グループに分かれ、ボランティア活動のあり方について話し合いました。また講師には神戸市のご自宅で被災されたカウンセラーの中谷加代さんをお招きし、被災者への心のケアについてご意見いただきました。

被災地への祈りをこめて クリスタル・ボウルのコンサート



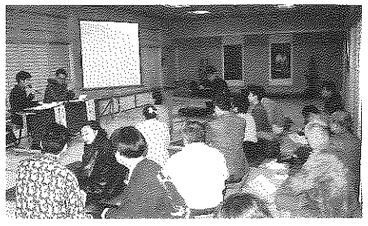
阪神・淡路大震災は世界にも大きな衝撃を与えました。去る3月26日、大阪・平野区の全興寺を会場に、アメリカ人のクリスタル・ボウル奏者・シスター・パッカさんによるチャリティ・コンサートが開催されました。

これはラージャ・ヨーガ瞑想センターの招待で、来日の決まっていたパッカさんが「被災地へ祈りを捧げたい」と強く希望。要請を受けた大阪仏教救援センターと全興寺が共催し、アーユス関西（秋田師代表）が企画して実現しました。

石英ガラスのクリスタル・ボウルによる神秘的な演奏と全興寺住職・川口良仁師の声明のジョイントの他、乙女文楽の奉納や青池憲司監督の「カトリック鷹取教会からのビデオレター」上映など盛り沢山の内容となりました。

寒空の下、静かに流れるクリスタル・ボウルの音色に、被災地への祈りを重ねました。参加は120名。

映画を観ながらアジアに親しもう「ベトナム・カルチャー・トーク」



アメリカとベトナムの国交正常化が実現し、ますます注目を集めるアジアの躍進の国・ベトナム。アーユス関西はベトナム農村の支援活動を続けていますが、広くこの国を知っていただこうと、去る4月1日、大蓮寺客殿でトークイベントを開催しました。参加は25名。

ベトナムを取り上げたイベントは、昨年の「チャオ・ベトナム」に続いて2回目。今回は毎日新聞記者の鈴江康二さんを講師にお招きし、ベトナム映画の「黒いサボテン」を観ながら歴史や民族、生活文化について学びました。

アーユス関西では、ベトナムへのスタディ・ツアーを計画中ですが、その他一般のボランティアも募集しています。お問い合わせはアーユス関西事務局まで。

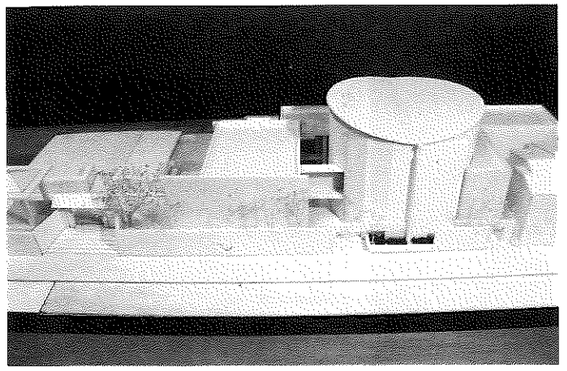
「21世紀の父親を考える講演とトーク」父の日イベントを開催

去る6月10日、秋田師が事務局長を務める全国幼児教室連盟の主催で、父の日イベント「21世紀の父親を考える講演とトーク」が梅田茶屋町のMBS毎日放送・ギャラクシーホールにて開催されました。参加は 256名。

「父親不在」といわれる現代社会。男女協同化が進み、父親としてのアイデンティティが希薄になりがちな「悩めるお父さん」にとり、父の日は決して“おめでたい”だけの日ではないはず。「子育て」をキーワードに、お母さんも参加して一緒に未来の父親像について考えてもらえれば…と、秋田師が企画しました。

ゲストには東京大学助教授の汐見稔幸先生を始め、タレントの堀ちえみさん、雑誌『ひよこクラブ』副編集長の森井真理子さん、関西テレビの杉本真一さん。メインでは秋田師も加わって、熱のこもったトークが展開されました。





ウォッチング　應典院

應典院歳時記

～生きる歓び、感じたい～

取材／編集部

お寺は、かつて街のシンボルでした。人々の生活の場と隣り合わせでありながら、厳かな雰囲気を保った特別な場所。人々が集い、大人も子どもも、ともに喜びや悲しみを分かちあえる場所――本来のお寺の姿とは、そういう人間の聖なる価値を包み込んでいました。

このたびの應典院の試みは、まさにこのお寺の原点に立ち返ろうとするもの。儀式や習わしをことさらに誇張するのではなく、仏教の「こころ」を現代にマッチした形で、人々にわかりやすく提示していきます。そのための、いわば触媒となるもの――それがさまざまなかたちで行われる「イベント」なのです。

劇場型の本堂は、最新鋭の設備を完備して、あらゆる世代を対象とした文化活動に対応。〈宗教〉〈教育〉〈アート〉の三つの分野を軸にして事業を推進し、人々の生きる都市に開かれた寺院として、生まれ変わります。

そんな文化のお寺・應典院は、その時々においてさまざまな表情を見せます。仮にその一年をいま俯瞰するとしたら…。ここでは、現在形で應典院のシーズンを追いかけてみました。

目覚めの季節・春

一年の始まり。人々が新しい年にそれぞれの思いを託し、祈りを込める一月。進学シーズンでもあるこの時期は、子どもたちにとって試練の続く日々。應典院のエントランスには「ちえ地蔵」が祀られています。子どもたちの学業成就と健康を祈願する法要が営まれます。

四月には、應典院独自の教育活動がスタート。母親を対象としたセラピー教室「こころの教室」では、親子関係について熱心に意見が交わされています。ここでは、お母さん自身の心を見つめなおすことが大切にされています。その他にも学校の先生方を対象にしたスクールや、また総合幼児教育のメソッドを応用したマンツーマン指導による障害児教育も計画されています。

春は、また旅立ちの季節。女の子にとっては子どもから少女へ育つ時。いつも離さず持っていた大好きなお人形とお別れすることは、人生の一つの通過儀礼と呼べるでしょう。「人形・おもちゃ供養会」で、このドラマの一ページを親子ともに心に刻みます。

またその他にも、小学生の子どもたちを対象にした「子ども信行道場」が行われます。子どもの時代の信仰体験は、その人格形成に大きく影響します。應典院では、本当の宗教心を育む、いろいろな行事を計画しています。

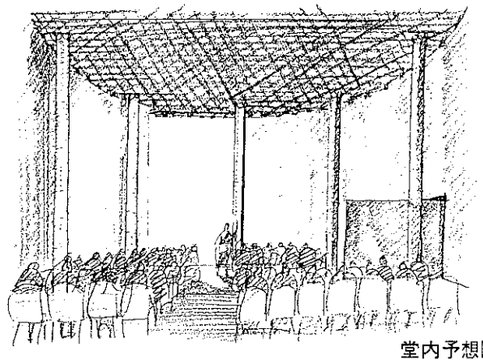
夏、静かに自分を見つめる

さて、暑い夏には、お楽しみ「納涼落語会」。怪談噺を中心に楽しんでいただきます。怪談は、殺伐とした都市生活にあって、一種の清涼剤。コワイお話の中から現代の闇を見つめ、そして心静かに自らと向き合う機会ともなりましょう。

また、お盆を迎えるこの季節は、亡き人を偲び、自分がこの世に今あることを感謝したいものです。在家修行として人気のある「写経」「写仏」を通じ、法の愉悦と人生の機微にふれてみてはいかがでしょうか。

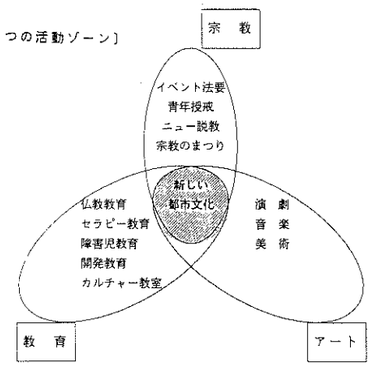
もうひとつのお盆、「地蔵盆」は子どもたちのお祭り。ここでは大人もいっしょに参加できる内容で、楽しんでいただきます。

長い夏休みを利用したボランティア活動も活発になります。ボランティアやNGO活動は、應典院の大看板のひとつ。市民・学生を対象に、国際協力や開発教育について学習会を持ちます。「アース＝仏教国際協力ネットワーク」や他の協力団体との連携をはかりながら、国際理解を深めます。ベトナム、カンボジア、タイなど、アジアの仏教国へ海外スタディ・ツアーも企画します。



堂内予想図

〔應典院　3つの活動ゾーン〕



秋、実りの季節

芸術の秋。應典院は絶好のアート空間を提供します。

劇場型の本堂では、「演劇」「音楽」「美術」の公演が連日行われます。演劇は若い世代に人気の小演劇を中心に、他に学生演劇や新人作家の公演をサポートします。また、世界の民族音楽や最新の環境音楽などのコンサートが開かれます。本堂をギャラリーとした美術展も、應典院の目玉企画です。

もちろん仏教の民俗芸能などの奉納も行われます。その他にも、アジアの仏教のお祭りを再現、寺域はエスニックな雰囲気に包まれることでしょう。

また、秋は思索を深め、自己を修養するにも絶好の季節。

宗教活動では、「青年授戒」を厳修する他、「ニュー説法」もあります。いずれも大胆なスタイルをとり、本堂のメディア機能を存分に活かした法会となります。伝統的な仏教から足が遠のいたといわれる若い人たちを対象に、親しみやすい内容でとりおこないます。

また、大蓮寺ゆかりの石門心学の祖・石田梅岩を顕彰した「梅岩忌」や、合祀供養や墓制の問題、そしてこれからの家族を考える「家族会議'97」などを開催します。

冬、一年間の安寧を感謝して

冬、街は年の暮れの慌ただしい雰囲気に包まれています。けれども應典院はいつも落ちついた環境を保って、訪れる人をお迎えします。

すっかり日本人の年中行事として定着した「クリスマス」を、なんと仏教寺院でお祝い――？。仏教には声明という美しい音楽世界がありますが、あわせてキリスト教の聖歌・賛美歌を聞きながら洋の東西を越えた音楽の調べに、宗教の普遍性を体感していただきます。いわば宗教音楽コンサート。外は寒い冬空に覆われていますが、堂内に響きわたる聖なる歌声にふれた時、身も心もあたたかく、やさしい気持ちになれることでしょう。

歳末の助け合い募金も活発に。チャリティコンサートやバザーの活動も活発になります。

やがて一年の締めくくりを迎えます。境内では大蓮寺の除夜の鐘が響きます。年の変わり目には、應典院本堂で修正会が。いく年くる年のこの一時、見知らぬ者同士ですが、ともに仏前に新年の誓いをたてます。

このようにして、四季折々に應典院は表情を変化させていきます。それは人々の生活とともに歩む、應典院の姿なのです。もちろん常設の教育活動は通年継続される他、年中行事に加えて、仏前結婚式や成人式といったハレの企画にも取り組みます。

應典院は、いわゆる伝統的な祭祀のみならず、新しい文脈による都市の仏教文化を創造し、きわめて実験的な活動を進めていきます。ここには伝統的なスタイルを、現代的にわかりやすく解釈しながら、仏教の原点を模索しようとする秋田住職の思想が貫かれているのです。

都市の生活から失われた、こころのふるさとを描き出し、ふたたび同じ都市の生活者としてあたたかな連帯と共感の共同体を取り戻したい――應典院は、二十一世紀の都市寺院の挑戦です。新しい仏教のありかたを、市民といっしょに考えながら、追究していこうとしているのです。

ひとりひとりの應典院、あなたにはどれを選んでいただきましょうか。

●

應典院再建資金　募財協力のお願い

應典院の再建にあたって必要な仏具を含む設備資金を、募財として檀信徒ならびに有縁の方々より募ります。

募財には聖柱銘記と宝珠銘記の二種類があります。聖柱は仏教世界の時空を表し、宝珠は仏教護持の象徴でもあり、完成後は堂内で柱を巡礼する「ミニ遍路」も計画されています。文化の寺・應典院に相応しい荘厳を極めながら、再建への気運を高めていきます。詳細は、パンフレットをご覧ください。

聖柱銘記　一口弐萬円

本堂内に建っている十本の柱に、施主のお名前をお一人お一人刻名していきます。これらの柱は十念や十方を表し、それ自体が信仰の対象になります。よってここに記された方々のお名前は、應典院を支える象徴として永く護念されるでしょう。

宝珠銘記　一口参拾萬円

十本の聖柱の断面は六角形になっており、その上部の各面には宝珠が祀られ、計六十体の仏様が描かれています。宝珠は金箔のメダル状のもので、中に施主の写経を納めることができます。施主は個人・法人を問わず申し込めますが、代表者のお名前は、正面の聖柱に刻み、永く護念します。尚、施主は應典院落慶式（平成九年五月）に先駆けて開筵される納経法要にご招待の他、應典院特別会員として登録されます。